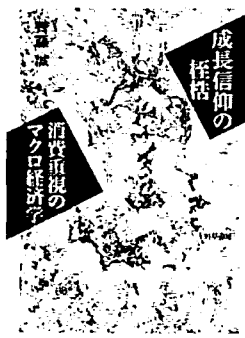


齊藤 誠著

本書の内容は、『成長信仰の桎梏』といういさか重々しいタイトルとは裏腹に、最近のマクロ経済学における主流な議論の一つを、一般読者にわかりやすく説明しようとした啓蒙書である。マクロ経済学の考え方は、過去四半世紀の間に大きく変化した。しかし、世間一般に流布している考え方は、旧態依然たるものがある。著者の論調からは、このキャッチを埋められないことに対する苛立ちがひしひしと感ぜられる。

評者個人は、いわゆるエコノミストの「マクロ経済学」に共感を覚えるところもある。特に、本書ではあまり重視されていない景気循環の問題は、マクロ経済学の古くて新しい最大のテーマの一つであると思っている。最近のマクロ経済学では、過度に合理的な経済人を前提とした経済分析に対する見直しも進んでいる。マクロ経済学の考え方は、これからもダイナミックに変わっていくことは読者



(勁草書房・二二〇〇円)
▼さいとう・まこと 60年生
まれ。一橋大学教授。専門は
マクロ経済学など。

マクロ経済学の最先端を解説

も留意する必要がある。

本書では、背後にある難しい理論をできるだけ平易に解説しているが、内容が内容だけにマクロ経済学を学んだことがない読者には専門的な記述が多いかもしれない。消費を重視した政策が重要であることは、マクロ経済学に限らず、多くの人々が総論では同意するであろう。しかし、往々にして、各論になると合意を得ることが難しい。

特に、われわれが重視しなければならぬものが、現在の消費だけでなく、将来世代にわたる消費となれば、現在どのような政策が望ましいかは簡単ではなくなる。経済厚生という観点からは、消費だけでなく労働時間も考慮する必要がでてくる。消費の重要性を強調する本書で、いま日本でどのような政策が必要なのかに関する具体的に踏み込んだ提言が少なかったのは残念であった。

もっとも、本書を通じて、多くの読者が「マクロ経済学とはどんな学問なのか?」と漠然とでも関心を持てば、一つの目的は達成されたといえる。マクロ経済学の最先端の研究を十分に理解してもらうことは、当然重要であるが、決して容易なことではない。本書は対話の契機につながる一石を投じた点でその意義は大きい。

東京大学教授 福田 慎一